

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770140

研究課題名(和文)非真理条件的スケール表現の談話構造とコンテキスト変換機能

研究課題名(英文)The discourse structure and context-shifting functions of non-truth conditional scalar expressions

研究代表者

澤田 治 (Sawada, Osamu)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：40598083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトでは、非真理条件的スケール表現の談話構造とコンテキスト変換機能について考察した。「それより」、「とても」、「よっぽど」や驚きを表す指示詞「あの」などの様々な非真理条件(語用論)なスケールの意味に焦点を当て、(i)スケール性や比較の概念は、意味論レベルのみならず、談話レベルにおいても体系的な形で存在し、(ii)我々はそれらの概念を柔軟に使用して、相手に対する反論、話題の転換、意外性等、様々な話者志向的意味を伝達しているという点を形式意味論・語用論の観点から論証した。

研究成果の概要(英文)：This project investigated the discourse structure and context-shifting functions of non-truth conditional scalar expressions. Through a detailed analyses of both the meaning and use of various non-truth conditional scalar modifiers, such as the Japanese *sore yori* 'than it', *nanni-yori* 'what-than', and *totemo* 'very', as well as the mirative demonstrative *ano* and the English *more than anything*, more than that, this project shows that (i) there are scale structures in the discourse-pragmatic dimension (not only in the semantic dimension), and (ii) scalarity is used flexibly to signal various kinds of pragmatic meanings, such as objection, topic change, and mirativity.

研究分野：意味論, 語用論

キーワード：discourse structure conventional implicature context shift scalarity comparison intensifier expressives degree

### 1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマは、「非真理条件的スケール表現の談話構造とコンテキスト変換機能」である。本研究の着想に至った経緯としては、自然言語のスケール修飾語 (scalar modifiers) の「二重使用現象」(dual-use phenomena)が挙げられる。

二重使用現象とは、ある表現が意味論 (真理条件) レベルにおいても語用論 (非真理条件) レベルにおいても用いられる現象である。たとえば、Sawada (2010)で明らかにされているように、以下のスケール表現「ちょっと」と「何よりも」は二重現象を有している。

(1) a. この竿はちょっと曲がっている。

(意味論的 (真理条件的) 意味)

b. ちょっとハサミを貸していただけますか? (語用論的 (非真理条件的) 意味)

(2) 何よりもテニスは楽しい。

a. テニスはどのスポーツ (アクティビティ) よりも楽しい。(意味論的読み)

b. 「テニスは楽しい」という情報は最も重要な情報である。(語用論的読み)

(1a)における「ちょっと」は、竿の曲り具合を意味論レベルで測っているのに対し、(1b)の「ちょっと」は、話し手の発話行為 (要求) の押し付け度を語用論レベルで和らげている (Sawada 2010)。また、「何より」を伴った(2)には、意味論的読みと語用論的読みの2通りの読みがあるが、(2a)の意味論的読みにおける「何よりも」は「テニスとそれにとって代わるスポーツ・アクティビティを意味論レベルで比較しているのに対し、(2b)の読みにおける「何よりも」は、当該の命題 (あるいは発話) (=「テニスは楽しい」とそれにとって代わり得る命題 (発話)) を語用論レベルで比較している。意味論と語用論のインターフェイスの観点から上のデータを考えると(1a)、(2a)におけるスケール表現の意味は、

真理条件的意味であるのに対し、(1b)、(2b)におけるスケール表現の意味は、文の命題の真偽性には関わっていない意味 (すなわち、慣習的推意) (Grice 1975; Karttunen and Peters 1979; Potts 2005; McCready 2010)と分析することができる。このようなスケール表現の二重現象は様々な言語に見られる通言語的現象である。

近年の意味論と語用論の理論では、真理条件的意味と非真理条件的意味は互いに独立した「次元」(dimension)に属しており、両者は意味的性質において大きく異なっていることが論じられている (Potts 2005)。しかしながら、スケール表現の二重現象は、真理条件的意味と非真理条件的意味の間に何らかの共通性も存在していることを示唆している。

### 2. 研究の目的

これまでの研究により、意味論レベルでのスケールの意味と語用論レベルでのスケールの意味の間の共通点・相違点がかなり明らかになってきた。しかしながら、語用論・談話レベルにおけるスケール性の体系性およびコミュニケーション上の機能についてはまだ解明できていない点が多々ある。本研究では、非真理条件的 (感情表出的、談話的) スケール表現の談話構造とコンテキスト変換 (context-shifting) 機能に焦点を当て、スケール性が感情表出・談話構造においてどのように使われ、コミュニケーションにおいてどのような役割を果たしているのかという問題をさらに理論的に考察する。

### 3. 研究の方法

研究については、以下の方法・プロセスで行う。まず、「それより」、「何より」、「もっと」、「ちょっと」や英語の *more than anything*, *more than that*, *totally* など様々な談話レベル (非命題レベル) で使われるスケール表現

のスケールの特性について、様々な実例・コーパスデータも含め、詳細に検討し、談話レベルにおけるスケール構造の体系性・種類について考察する。次に、それらのスケール構造が、どのような状況・談話において使用されるのかという点について考察する。また、談話的スケール表現の適切性条件・使用条件を考察する。さらに、埋め込み環境における非真理条件的スケール表現の解釈についても考察し、非真理条件的スケール表現の視点の振る舞い（投射性）について理論的に考察する。

#### 4. 研究成果

主な研究成果は以下の通りである。

##### (1) 非真理条件的スケール表現の構造

非真理条件的なスケール修飾語には、大きく分けて、「高位の語用論的スケール修飾語」(higher-level pragmatic scalar modifier)と「下位の語用論的スケール修飾語」(lower-level pragmatic scalar modifier)の2種類のタイプがあり、前者は、発話もしくは命題を修飾し、「押しつけ度」や「重要性」といった非明示的な語用論的スケールを参照して非真理条件的なスケールの意味を表しているのに対し、後者は、程度述語を直接修飾し、程度述語のスケールを参照して非真理条件的なスケールの意味を表しているという点を明らかにした。

##### (2) 談話的比較構文のスケール構造

日本語の比較表現(「それより」、「何よりも」)の談話機能について、様々なデータを基に考察した。「それより」は、当該の発話の方が前の発話よりも重要であるという意味を有しているが、しばしば、話題を転換する際に用いられる。一方、「何よりも」は、当該の発話が最も重要な情報であるという意味を有しているが、この表現は、情報の優先性

を伝達する際や、「そして何よりも」のように、累加的に発言を強化する際に使われる。本研究では、談話機能の背後には、「終点的スケール」と「非終点的スケール」の2種類のタイプのスケール構造があり、それらの構造を用いて、様々な談話的機能を表示しているという点を明らかにした。

##### (3) 否定極性項目の「とても」

非命題レベルで用いられる否定用法の「とても」の意味および談話的特性について考察する。否定用法の「とても」は、通常程度副詞の「とても」と異なり、否定文でしか使われないという点で、否定極性項目(negative polarity item) (NPI)と考えることができるが、通常否定極性項目とは異なる意味・機能を有している。本研究では、否定の「とても」は、ある命題 $p$ が発話状況の中で活性化され、真であることが期待されている中で、話し手が $p$ の不可能性・ありえなさを強調する感情表出表現であると主張し、否定の「とても」は発話状況と深く関わった談話的NPIであるということを明らかにした。今後は、否定用法の「とても」の極性現象が、否定極性項目の理論一般にとってどのようなことを示唆しているのかという点についてさらに考察を深めたい。

##### (4) 驚きを表す「あの」

共同研究者の澤田淳氏と驚き用法の「あの」の意味について考察した。驚き用法の「あの」は、命題に対する話し手の驚きを表す状況で用いられるが、その背後には、「あの」がつく名詞の属性からすると、当該の命題が成立する可能性は低いという非命題的なスケールの意味がかかっているということを論証した。今後はさらに、意外性の理論の中で、驚きの「あの」をどのように位置づけることができるかという点について考察したい。

(5) 埋め込み環境における非真理条件的スケール表現の解釈

本研究の後半では、埋め込み環境における非真理条件的スケール表現の意味についても考察した。

例えば、感情表出表現として使われる副詞「もっと」は、単純文（非埋め込み環境）においては、に見られるように、現状に対する「話し手」の不満（現実の程度と期待値との間のギャップ）を非真理条件レベルで表している。

もっと一生懸命勉強しなければならない。  
（「もっと」=話し手志向的）

しかしながら、以下のように、「もっと」が態度補文の中に埋め込まれた場合、通常、「もっと」は、主節主語（太郎）の感情・不満として表される。

太郎はもっと一所懸命勉強しなければならないと思っている。（「もっと」=主語志向的）

興味深い点は、のように、もしの主節に話し手志向的なモダリティ「べきだ」が挿入されると、埋め込み文内の「もっと」は話し手志向的にも、主語志向的にもなり得るという点である。

太郎はもっと一生懸命勉強しなければならないと思うべきだ。  
（「もっと」=話し手志向的、主語志向的  
であまい）

本研究では、「もっと」の視点の取り方は、文内の他の要素（判断表現）に影響されるということをして、「判断依存性」(judge dependency)の概念を用いて理論的に説明したが、今後は、このような視点の切り替えの

現象がどの程度一般的な現象であるのかという問題について、様々な非真理条件的内容語の投射的振る舞いを詳細に検討し、考察したい。

(6) 「よっぽど」とモダリティの共起性  
程度副詞「よっぽど」は、形容詞を使った単純文においては、証拠性を持つモダリティと共起する必要がある。

このラーメン屋はよっぽどおいしい\*(にちがいない)。

本研究では、「よっぽど」は単に高い程度を表すのではなく、普通でない状況を基に、想定外的な程度を非真理条件レベルで表している程度副詞であると主張した。

重要な点は、埋め込み環境においては、aのように、「よっぽど」が同一節内のモダリティと呼応することも、bのように、主文におけるモダリティと呼応することもできるという点である。

- a. 太郎はこのラーメン屋はよっぽどおいしいに違いないと思っている。
- b. 太郎はこのラーメン屋はよっぽどおいしいと思っているにちがいない。

今後は、このような「呼応」関係はどのように理論的に説明することができるのかという問題についてもさらに考察を深めたい。

5. 主な発表論文等  
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 11 件)

Sawada, Osamu. Scale structures in discourse: Discourse-pragmatic properties of Japanese comparative expressions. *Proceedings of the Linguistic Society of America* Vol.3 (7), pp. 1-15, 2018, 査読なし.

Sawada, Osamu and Jun Sawada. The modal demonstrative in Japanese.

*Proceedings of the International Modality Workshop*, Vol 13, pp. 91-130, 2018. 査読なし.

Sawada, Osamu and Jun Sawada. (2017) On the property of mirativity in the Japanese modal demonstrative *ano*. Kenshi Funakoshi, Shigeto Kawahara, and Christopher D. Tancredi (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 24, pp. 141-155. 2017, 査読あり.

Sawada, Osamu. The Japanese negative totemo 'very': Toward a new typology of negative sensitive items. In Jessica Kantarovich, Tran Truong, and Orest Xherija (eds.), *Proceedings of the 52nd Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 2017, pp. 437-451, 2017. 要旨査読あり.

Sawada, Osamu. The projection of non-at-issue meaning via modal support: The meaning and use of the Japanese counter-expectational adverbs. In Mihoko Otake, Setsuya Kurahashi, Yuiko Ota, Ken Satoh, Daisuke Bekki (eds.), *New Frontiers in Artificial Intelligence (Lecture Notes in Computer Science)*, vol 10091, pp. 122-137. 2017. 査読あり.

Sawada, Osamu. Interpretations of embedded expressives: A view from the Japanese comparative expressive *motto*. *Proceedings of the 13th International Workshop on Logic and Engineering of Natural Language Semantics*, 120-133. 2016. (要旨査読あり)

Sawada, Osamu. Interpretations of embedded pragmatic scalar modifiers. *Proceedings of the International Modality Workshop* vol. 10, 57-109. 2016. (査読なし)

Sawada, Osamu. The (non)-projective

properties of the Japanese counter-expectational intensifier *yoppodo*. *Proceedings of the Linguistic Society of America*, Vol 1 (article 20), 1-15. 2016. 要旨査読あり.

Sawada, Osamu. (2015) The degree of the speaker's negative attitude in a goal-shifting comparison. In Christopher Brown and Qianping Gu and Cornelia Loos and Jason Mielens and Grace Neveu (eds.), *Proceedings of the 15th Texas Linguistics Society Conference*, 150-169. 要旨査読あり.

Sawada, Osamu and Jun Sawada. (2014) The meaning of modal affective demonstratives in Japanese. With Jun Sawada. In Seungho Nam, Heejeong Ko and Jongho Jun (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 21, 181-196. Stanford, CA: CSLI Publications. 査読あり.

[学会発表](計14件)

Sawada, Osamu. Scale structures in discourse: The discourse-pragmatic properties of the Japanese comparative expressions. The 92nd Annual Meeting of the Linguistic Society of America. 2018.1.6. Salt Lake City (USA).

Sawada, Osamu. Scale structures in discourse: Discourse-pragmatic properties of the Japanese comparative expressions *sore-yori* and *nani-yori*. Semantic Research Group. 2018.3.9. 慶応大学(神奈川).

Sawada, Osamu. Interpretations of the embedded expressive *motto* in Japanese: Varieties of meaning and projectivity. DGfS Workshop: Secondary Information & Linguistic Encoding. 2017.3. 8. Saarland (Germany)

Sawada, Osamu and Jun Sawada. On the property of mirativity in the Japanese modal

demonstrative *ano*. The 24<sup>th</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference. 2016.10.14. 国立国語研究所 (東京) .

Sawada, Osamu. Interpretations of embedded expressives: A view from the Japanese comparative expressive motto. Logic and Engineering of Natural Language Semantics 13 (LENLS 13). 2016. 11.15. 慶応大学(神奈川県).

Sawada, Osamu. The Japanese negative *totemo* ‘very’: Toward a new typology of negative sensitive items. The 52nd Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society. 2016. 2.21. Chicago (USA).

Sawada, Osamu. The (non)-projective properties of the Japanese counter-expectational intensifier *yoppodo*. The 90th Annual Meeting of the Linguistic Society of America. January 9, 2016. Washington, DC (USA)

Sawada, Osamu. The projection of non-at-issue meaning via modal support: The meaning and use of the Japanese counter-expectational adverbs. Logic and Engineering of Natural Language Semantics 12 (LENLS 12). 2015. 11.16. 慶応大学 (神奈川県)

Sawada, Osamu. The Japanese negative *totemo* ‘very’: Toward a new typology of negative sensitive items. The Göttingen workshop on negation and polarity. 2015. 9.18. Göttingen (Germany).

Sawada, Osamu. Polarity sensitivity of the Japanese intensifier *totemo* ‘very.’ The 89th Annual Meeting of the Linguistic Society of America. 2015.1.9. Portland, OR (USA).

Sawada, Osamu. Polarity sensitivity and update refusal: the case of the Japanese

negative *totemo* ‘very’. Logic and Engineering of Natural Language Semantics 11 (LENLS 11). 2014. 11.24. 慶応大学 (神奈川県) .

Sawada, Osamu. The degree of the speaker’s negative attitude in a goal-shifting comparison. The 15<sup>th</sup> Texas Linguistics Society Conference. 2014. 10.25. Austin (USA).

Sawada, Osamu. Varieties of goal: the goal-oriented comparisons in Japanese. The Semantics of African, Asian and Austronesian Languages (TripleA 1). 2014, 6.12. Tübingen (Germany).

〔図書〕(計1件)

Sawada, Osamu. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface*. Oxford Studies in Theoretical Linguistics. Oxford: Oxford University Press. 2018. pp. 272.

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://faculty.human.mie-u.ac.jp/~sawada/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

澤田 治 (SAWADA OSAMU)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：40598083